

土 淨

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一冊）
 昭和二十四年四月二十八日運輸省特別換承認第三五二號
 昭和三十一年八月二十五日印刷
 昭和三十一年九月一日發行

第二十二卷

第九號



九月號

卷・頭言

まるでメリーゴーランドにでも乗せられてぐるぐるまわりしてゐるみたいなの、今の世の餘りにもはげしい移り變りよう！ ただアレヨアレヨと目を丸くする外はない。二十年も三十年もおくれていた日本が、背中からイヤというほどドヤしつけられて、原子文明の唯中につき出されたのだから、ふらつくのも無理はないが、それにしても少々みんな行き當りばつたりにすぎるようだ。敗戦という泥沼からはいすり出ようともがく者にとつて、それが一本の香花であつても、思はずすがりつきたくなるのも人情であらう。近頃、色んな宗教が強引に人々を多くの迷信にひきすりこんでいるのも、實はこうした人情のキビをついてゐるのである。

人々は、自分の願望や努力と、それを實現できない世相のきびしさとの間のパララックス（ちぐはぐ像）を正し、現實の悲しきギャップを埋めてくれるものを、何か自分以外の原因に求めようとする。こんなにやつてゐるのに恵まれないのは何かのタタリかしら？ こんな古い民族宗教的な考え方が新興宗教の殻をかぶつてそうだと指摘されると、矢張りそうかと何がなし安心する心のつまづきがあるのである。そこからして、迷信は更に迷信を呼んでゆく。今日も東上の車中に大勢シキミを持つてゐる一團がいた。聞けば大石寺へお詣りして買つて來たという。東京の方が安いんですけどという。全くの呪物崇拜の心理である。靈友會の靈牌やお水と同じで迷信以外の何物でもない。

人々は目先のパララックスを、こうした末梢的な呪術的技法で匡正できるかにだまされてゐる。古い迷信の上に坐りこもうとする心は、こうして迷いの幕を眼の前にひつかぶる。大切なのは、その眼を開き、自らの生命の根源を顧みて、而うして、み佛の大生命にふれることである。み佛のみ名を呼ぶ素直な心に立ち返ることである。そこに恩寵が顯われる。（中村康隆）

目次（日常勤行式特集號）

浄土宗の勤行式について	渡邊眞海(1)
香 偈	佐藤良智(7)
三寶禮	藤井實應(9)
奉請文	藤木隨教(12)
略懺悔文	谷部禪雄(14)
三尊禮	吉水大信(15)
開經偈	中野隆元(18)

讀經の意義	松濤誠廉(4)
歎佛偈	福富海岳(20)
法語 一枚起請文	佐藤賢順(21)
念佛と回向	小澤勇貫(25)
四弘誓願	佐藤密雄(28)
三身禮	戸松啓眞(31)
送佛偈	眞野龍海(32)

淨土宗の勤行式について

渡 邊 眞 海

一、淨土宗勤行の起源

淨土宗の勤行式と申しますと四角張つてきこえますが、淨土宗のおつとめの方法と云うのではないかと思います。

元來淨土宗念佛門の日日勤行の方法は宗祖法然上人が選擇集第二章私尺段で五種正行として讀誦正行、觀察正行、禮拜正行、稱名正行、讚歎供養正行と規程されまして、其他に六時禮讚を勤められたものであります。

(1)
即ち宗祖は日々の口業行事として日課稱名と淨土三部の讀誦、六時禮讚を勤められたのであります。特に宗祖が念佛弘通には南都北嶺の宗權の壓迫を注意しつゝ弟子信者達に勸奨されたのではないかと考へられるのであります。幸にして宗祖が六十歳建久三年二月二十六日後白河法皇の臨終御善知識に召させられ臨終行儀をお勤め申同年三月十三日五十六歳の寶算を以て崩御せられたので御中陰の御法事

には讀紀六時禮讚念佛をお勤め申上たと勅修御傳等に傳えてあります。其を裏書する記としては二祖聖光上人の授手印には念佛往生淨土宗血脈相傳手次の下に

第十三年の御遠忌に當て(元久元年)蓮花王院の内に於て六時禮讚淨土三部經を勤修し奉り御追善に之を遂げ玉ふ此れより後花洛の諸人皆淨土宗を以て追善を修す(下略)の文によつて明らかなるが如く淨土宗的勤行式が公然に行はれる様になつたのであります、此の時宗祖は七十二歳の御老齡でありまして不屈不撓の念佛弘通の大信念は萬民の支持を受けて自然法爾に傳播する様になつたのであります。舊佛教より反對の巨火は烈日と燃えて宗祖を中心としての念佛壓迫の魔手は遂に宗祖流罪迄と發展したのであります。然しながら民衆に浸透した念佛の法味は益々其の滋味を發揮する様になつたのであります。

爾來、淨土念佛門は北條、足利等の政治的變遷と其れに

便乗した曹洞、臨濟等の勢力伸張の爲めに所謂「念佛道心者」として隨喜大衆の支持によつて宗脈を保つていたものと思ひます。

二、宗運の興隆

建武中興以後、延元二年南北朝對立してより五年目興國二年（西曆一三四一）第七祖了譽聖上人出世され、八歳の時（西曆一三四三）第六祖瓜連常福寺の成阿了實上人の弟子となり切礎琢磨の結果直牒、頌義傳通記糅抄等三十有部を著述して淨土宗の宗學的基礎を確立し、また、念佛信行策勵の一方便として五重相傳を定め、明德四年十二月三緣山増上寺開山なる弟子西譽聖聰に相傳されました。付法相承をした第八祖としての西譽上人は大檀那、千葉、佐竹の支持を得て増上寺に叢林を開き、宗侶の養成に盡力する様になつて、其の弟子門葉から俊才輩出して淨土宗専門の道場が開設される様になつたのであります。即ち宗學的基礎と傳道の道場と宗徒の養成輩出とが確立したのであります。然し其の外護の力は地方の豪族や武士階級、町人百姓等の信者の一燈であつたと想像されるのであります、従て六時勤行法を如實に勤めたものでありまして、格別の法要式は未完成であつたのです。

但し、宗祖に對する報恩行に於ては足利中期に第八祖西譽上人の弟子大譽慶竺が百萬遍より知恩院第二十一世となり、宗風宣揚と共に祖忌の法則を定め、諷誦を製し永式と

なりました。後柏原天皇大永四年現住第二十五世超譽存中に勅を賜ひ、毎年正月一七日の御忌を修せしめられました。爾來年々御忌を正月一七日間奉修したのであります、従て此の御忌法會の式定は特定のものであります。

三、淨土宗法要集の制定

壹千三百五十一年前推古朝十三年に佛教が日本に渡來以來佛教各宗の消長を考へる時、常に時代の政治的勢力を利用した宗派が其の時代の人心を或程度支配したのであります、淨土宗も其の例に漏れず、徳川家康が天正十八年八月江戸入府以來増上寺第十二世源譽存應に歸依し、岡崎大樹寺以來の因縁を以て寺檀の關係を結び、慶長八年二月十二日征夷大將軍に補せられ、名實共に日本全國三百諸侯に君臨するの地位を獲得するや、現芝公園地二十五萬坪を廻町貝坂の舊地の換地として寄進し、大僧正は十萬石の格式を與へ將軍家の香華寺としてまた、一宗の總錄所として責任を取ることになり、一宗上下を支配する法規が元和元年七月二十四日三十五箇條の法度として幕府が認可發布せしめたのです。此の法度を基準として檀林掛錫の宗侶の教養が確立したのでした。

同寺第十七代照譽了學師の時寛永九年一月二十四日二代將軍秀忠公薨去し其の葬儀を増上寺で執行する事になり、其の法要式を定める必要を生じたので役僧を京都奈良高野等の諸大寺に遣はし法要次第を調査の上將軍家の法要式を

定め二月十五日に増上寺大殿に於て本葬儀が執行されたのでありました。引續き中陰年忌法會等が御靈屋に於て執行される様になり、專屬の法式衆が三十坊設けられて所謂將軍家の法要式として門外不出の差定でありました。

以上の如く本宗としては淨土三部經讀誦と六時禮讚が通常の勤行法でありましたが、知恩院の御忌法要式と増上寺の將軍家の佛事法要式は特殊の式定であつたのです。一般寺院には行はれなかつたのであります。

享保年度に瓔珞庵敬首利上が淨土禮誦法として、香偈、三寶禮、四奉請、懺悔、十念、開經偈、誦經、攝益文、念佛一會、回向、總願偈、十念、四弘誓願、三歸禮、送佛偈の十五項の差定を以て組織してあります。此の差定は起と結とを順序立てゝありますので、他宗の人が此を推稱したのでした、従つて此の勤行式は可成普及し現在も實行されていきます。

明治四十四年宗祖七百年御忌奉修を一轉機として宗學の興隆、淨土宗法要式の統一制定等の運動が盛になりました。淨土宗務所に法式調査會が出来、宗侶中より威儀、韃稚、音聲、法式差定等に練達の方々を依囑し、研究論難を重ねて、昭和十四年十二月に淨土宗法要集が出版されました。此を改訂して法然上人七百五十年御忌記念として昭和廿八年十月に再版しました。

現行の淨土宗宗制には定期法要として、修正會、御忌會、涅槃會、勅謚紀念會、鎮西忌、善導忌、春秋彼岸會、宗祖

降誕會、記主忌、盂蘭盆會、施餓鬼會、十夜會、成道會、佛名會、等の外特定の法要式が輯録されてあります。以上挙げた諸法要の根本となるものは日常勤行法と思います。

四、日常勤行への考察

何れの宗教でも神人合一、能所一體、佛凡一如の三昧境現前には細心の考慮を拂い、宗教儀式を行う時は敬虔の態度と嚴肅性を失わぬように配慮しています。本宗に於ても話説教と併行して法要儀式の嚴肅性を保つことは最も大切なであります。尋常、別時、臨終の三種の行儀がありますが其の行儀の基本となる尋常の行儀が其の儘の姿と申しまして道場、香花灯明供物等の莊嚴が不潔不淨では駄目であります。信は莊嚴からと申しますから先達の人は常に細い處に注意して頂きたいのです。

日常勤行式の勤め方にも宗侶のみの時と、僧俗同行の時とありますから、吳和兩音適當に考案すべきであります、即ち信徒用、青少年用等又は音楽法要等の區別ありますが時代相應の先走りのみ懸念になりましたして勤行法の本義を失はないように心懸けたいものです。従て音の調節にしても序破急や音階の高底に注意して宗教儀式の持味莊重味を失はないことを忘却してはなりません。

以上疎雑でありますが淨土宗の勤行法について小文を作りました。(淨土宗宗務長)

讀經の意義

松 濤 誠 廉

佛教では經典を讀むのに色々な方法と目的とがあります。高德の聖僧が時代に適しい新宗教を開くために一切經の中を適當な教を求めて讀むことから、今も學問をする人がする様に佛教の眞理・教理を研究するために學問の對象として讀む場合もあり、宗教的に或るお經の功德を信じてそれを得るために讀むこともあります。その功德といつても覺りを得るためとか、佛の國に往生するためとか色々あるわけで、一概には決定し得るものではないと思います。

淨土宗では五つの正しい行として、讀誦・觀察・禮拜・口稱・讚嘆供養とを擧げて居りますが、そのうちの始めに讀誦正行と云うのがあります。本宗の考方では、どこまでも往生の爲めには四番目の口稱、即ち南無阿彌陀佛と口で

唱えるのが往生の業でこれを正業と云い、他の四つをこれをたすけるもの即ち助業であるとしていますから、お經を讀むのも念佛によつて往生させて戴くための助けの行業にすぎません

そして佛教には御存知の通り澤山の經典がありまして、夫々立派なもので内容の勝れたものばかりですが、淨土宗では西方淨土に往生することを立前として居りますので、それに關したお經、即ち、觀無量壽經、無量壽經、阿彌陀經との三つを讀誦することを進めます。

その中、無量壽經の内容は、お釋迦さまがこの世にお出になつたのは一切の人達に眞實本當の利益を得させる爲めであるが、その眞實の利益と云うのは、阿彌陀さまの本願

である他力念佛であるとされて、阿彌陀さまが菩薩の時に立てられて完成された四十八願、それによつて出来た極樂世界や阿彌陀さまのお徳、または凡夫が往生するための行いを説かれたものであります。

觀無量壽經には、お釋迦さまは韋提希夫人の願によつて、定善といつて淨土に生れるための、淨土の佛、菩薩とその他の莊嚴を頭の中に畫いて觀察する行法を説かれ、更に釋尊御自身のお考えで、三福九品の一般の人の往生の善行即ち散善を説かれて、念佛往生の行をおすゝめになつたお經です。

阿彌陀經は極樂世界の有様を説かれたあとで、一切の善は小さい力しかないから往生は出来ないが、稱名念佛は功德が大きいから往生出来るのだと説かれ、上下四方の諸佛がこの事實を證明なさると云うことを説いたお經であります。これが淨土三部經の内容ですが、私達はこれ等のお經夫と全部か、或はその一部を読みます。

一般にお經を読むには、口や身體を淨めたあとで、佛像かそれにかわるものゝ前に正坐して勤行方式できめてある形をふんで、お經を読みたいものです。これは生活のために汚れた心を落つけて、きれいにするに益立つもので、これを踏むことによつて讀經の功德も一層増すものと思はれます。

さていよいよお經を拜誦する場合には、私達は先づ出来

るだけ正しく且つ意味を取りながら讀むことが大切と思ひます。それが馴れてきますとお經文を見なくてもスラ／＼と暗誦できる様になり、その意味内容も暗誦に従つて自然に樂に浮んできます。この様になると段々讀誦に没頭することが出来る様になり、しまいには阿彌陀佛の讚嘆と信仰の喜びの中にしたつて讀經一本になりきります。これを讀誦三昧と云うことが出来ると思ひます。

この讀經の功德はお念佛と共に淨土宗では大きなものと考えますので、これをふりむけて、亡なつた方の菩提を増長するために回向するわけです。

以上は淨土宗の傳燈にならつて讀經を簡單に述べてみたのですが、若い方々には満足のないところが澤山あることと思ひます。それは一つには西方淨土往生の立前が理解されないことゝお經の構成と讀み方とが新しい意味で解釋されていらないからだと思ひます。

佛教はすべて覺ること即ち本能から自由になつて、生れたまゝの人間より一層高次の人間になることを目的とするのですが、それには色々の心の持方（信仰）や方法（行）があるわけで、淨土宗では心のもち方を阿彌陀佛と西方淨土往生とし、行を念佛としたまでのことで、佛教の大きな目的には別に變りありません。この信と行との内容が大乘佛教の目的に最もよく適合すればこそ信仰されているわけで、この理由は更につき入つて説明することを必要としま

すが、今はその時ではありません。特講で私の佛教概説をお聞きになつた方は一部おわかりのことゝ存じます。

かく信と行とが決定したのでこれを説いた淨土三部經が主依の經典となり讀誦されるわけで、こゝに淨土信者の宗教的喜びと行としての獨特の意味があるわけですが、これ以外に何によらず一般に佛教經典を讀む場合の意義が附加されねばなりません。

淨土三部經は勿論のことお經は大體全部サンスクリットで書かれたものを支那語に譯したのでありますから、書いた人は勿論のこと翻譯された方も覺者であり或は少くとも覺りに干與された人ですから、そしてお經の内容も覺りと密接な關係のもとにあるものですから、私達の理解の及ぶ範圍で讀んだだけでも覺りそれ相應に關係づけられるばかりでなく、先に述べた讀誦三昧に入ることが出来るならばそれが一種禪定でありますから覺りの一助となることは言うまでもありません。淨土三部經は勿論のことながら、その他のお經を讀むことを淨土宗では決して禁じて居りませんので、佛教信仰の智識を廣くする爲めにも、本宗の眞義と價值とを知るためにも廣く經典を讀んで戴きたいものです。

最後に經典を讀む場合に是非心掛けて戴きたいことがありますのでそれを申しませう。お經は漢文に譯されたものを讀むのも結構ですが、更に進んで本來の意味を極める爲

めに、サンスクリット原典に科學的メスを入れるのもよいと思ひます。また和譯されたものを讀むのも親しみがあつてよいものです。いづれにしてもお經には一般の頭腦で解釋の出来る部分と覺つた人でなければ判らない部分とがあつてしかも後の部分の方が大事なところであると云うことです。この部分はいくら上手な人が翻譯しても表言することの出来ない内容で、假りに出来たとしても、覺らない私達では理解の出来ないものです。

従つて私達がお經をよみ、解釋する場合には、自分の理解は勿論大事なことですが、その爲めには昔から傳つてゐる解釋を參考にする必要がありますし、こうして理解した内容も、自分の境地の進歩と共に變つて行くものですから一途に自分の解釋のみ正しいと増上慢の心を起してはなりません。それよりは謙虛な氣持ちで、自分の境地が進むにつれてお經の眞の意味がますます明瞭になることを信じて凡夫であるが故に自分の理解の足りない點は、信仰と行によつて補いつゝ、宗教的體驗を通して理解を深めて行く様にせねばなりません。この事は總ての佛教にあてはまる事ですが、淨土宗としては西方の阿彌陀さまと、念佛による往生を信じ、實際に不斷無間の念佛を修しつゝ、三部經の意味を理解してこそ、始めて段々とお經の眞義がわかり、讀經の功德があらはれてくるのであります。

香 偈

願我身淨如香爐

念々焚燒戒定香

願我心如智慧火

供養十方三世佛

ねがわくば、わがみ、きよきこと香爐の如く、

ねがわくば、わがこゝ心、智慧の火のごとくして、

念々に戒と定の香をたき、

十方三世のみほとけに、供養したてまつらん。

淨土宗では、「日常勤行式」といつて、一宗の教義による宗教的實踐として、一定の形式による方法があります。形式ですから、どうも、いわゆる形式に終つてしまうことがあります。日々新鮮な、そして、敬虔にして情熱的なことを運んでこそ、宗教實踐である意味があるわけです。勤行式の最初におかれているのがこの偈だ。しつかりした内容を、實に、簡結に詩にしてある。通佛教の實踐をこの一句で表現しているのです。

いつたい、佛教では、その全體をどうまとめているかというのに、いろいろの仕方がある。三學といつて、戒と定と慧の三つでまとめている仕方があります。學ぶと言う文字が示しているように、實踐を主としたまとめかたであります。戒というのは、一口で言えば、修身であります。身を修めるのに、必要なことを簡定がきにしたのが、五戒とか、二百五十戒とか、いろいろある。淨土宗では三つの淨い戒めを説いています。

一、わるいことはやめる。

一、よいことをすゝんでする。

一、世の中のためになることをする。

これが戒であります。からだをとゝのえ、こゝろをたゞす、これが佛法の初めであり、終りであります。からだをとゝのえることが戒であります。

定はこゝろをたゞすことであります。私共のこゝろは、こゝろと言つて、實に際限がなく、自由奔放にころがるものです。しかし、これを無軌道に、わがまゝ勝手にころがらせては、動物になつてしまいます。動物は、佛法では畜生ですが、畜生ばかりでなく、それこそ、ちごくや、がきに落ちてしまいます。そこで、こゝろに軌道をあたえること、線路をあたえてやる、これが定であります。佛法では、一般には、心の統一したありさま(定)と散ばつたありさま(散)との二つに分けます。こゝろを統一させるの

には色々の仕方があります。淨土宗では強いて、こゝろを統一させなくともよいのでお念佛を申せば、おのづと無軌道に走らないのです。散ばつたこゝろのまゝで申せばよいのですが、とにかく、こゝろをとゝのえる方向にゆくことつた。そこで、ちえです。ちえこそ、人間の尊いたからです。智慧は、知識ばかりではありません。知識も、もちろん、智慧のなかにふくまれますが、知識のもう一つ奥にあるものが、智慧です。まこと、眞實を知ることゝろが、智慧です。佛法は、こよなく、この智慧を尊びます。なぜならば、まこと、眞理こそ、佛法のもとめるものだからです。さて、こゝで、わたくしは、香偈に、もどつて、お話をつゞけなければなりません。

掌を合せて、佛前に端坐し、靜かに、香をくんず。およそ、人間の姿のなかで、これほど、美しいすがたはないのではないでしようか。立てば芍薬坐ればぼたん、などの句があります。それは、もちろん、眞にうるわしいにちがいありません。しかし、なにか深さがたりない。それにくらべれば、この合掌のすがたは、深いもの、高いものに通じています。さて、淨らかな香に薫じた六尺の、この、からだを、一體、どうしようとするのか。東西南北、四隅、上、下の十方にまします。過去、現在、未來のみ佛に、さゝげまつらん。どのようにしてさゝげまつるのか。

わが身は、これ、宇宙自然のさづけ給はつた淨き香爐です。あゝ、淨き香爐の如くか。このことばの尊さよ。この淨き香爐に火を點じなければならぬ。その火は、なんの火か。佛法が、こよなく尊ぶ、智慧の火こそまことの火である。この火をこそ、この香爐にもらなければならぬ。そして、この火は、一刻、一刻に薫ぜられる、戒と定との香によつて、ますます輝き、高きかおりを放つであります。そして、この香は、登つてゆく、高く。ひろがつてゆく、かぎりなく廣く、十方に満ちみちたもうみ佛のみもとに。

われひさまづきて、このおもいをなす。

感激これにこえたものがありましようか。わたくしどものいのちは、一刻、一刻と、絶えまなく、もえたつていきます。しかし、眞實に燃焼しているでしようか。わたくしは若き日、*「生命の燃焼」*を思つてこゝろのふるえた思いをしたことがあります。

かぎりなき命とかぎりなきみ光りにましますあみだづつに、貧しいながらこの身と、このこゝろを、もえにもえさせて、あゝ、さゝげまつらん。この願いを、にちにちにもち、香偈を誦したてまつりたいものであります。

三寶禮

一心敬禮、十方法界常住佛
 一心敬禮、十方法界常住法
 一心敬禮、十方法界常住僧

「願わくは我身淨きこと香爐の如く」云々と、香燭によつて身心を淨め、こゝに三寶を敬禮したてまつることになります。これを三寶禮と申します。

三寶とは、いふまでもなく、佛、法、僧で、佛教徒たるものは三寶に歸依し、三寶を敬禮いたします。三寶に歸依しない佛教徒はありません、三寶を敬禮したのは佛教徒であります。

最近では世界の佛教徒が相提携し、佛陀の精神を輝かし世

界平和の爲に協力する機構も漸次整うて参りました。世界の佛教徒が一堂に會して協議する機會も多くなりました。かゝる機會には、先づ佛法僧の三寶に歸依する文をとねえ三寶を敬禮してから協議にうつることになっています。ピルマ、セイロン、シヤム、インド、東南アジア等の南方佛教や、中國、朝鮮、日本等の北方佛教、其の他アメリカ、ヨーロッパ各國の佛教、何れも佛教徒であるからには三寶に歸依敬禮いたします。三寶敬禮は宗派の如何を問いません。三寶を敬禮するが佛教徒であります。

佛とは、さとれるもの、覺者であり、眞人であります。

二千五百年前、印度に生れられた釋迦種族出の聖者が、三十五歳の御時、生死の一大事を解決し、從來の迷の夢さめて、さとのりの光が輝きわたり(自覺)、それより四十餘年、八十歳入滅に至るまで、東に西に、このさとのりの光、あまねく一切の衆生を照し、迷の夢よりめざめしめん(覺他)と教化救済せられました。かくて自覺した人は更に他を覺めさせる人となり、覺りの行は究竟し圓滿しました。これを佛陀釋迦牟尼世尊と崇め、略して佛陀、或は釋尊と仰いでおります。この佛陀によつてさとられ、説かれた眞理が法であります。釋尊が此世にお出ましにならなくても、法は嚴然として宇宙に一貫して流れていきます。釋尊はこの法を得て佛陀となられたのであります、そしてその法は佛陀によつて此世に明らかに示されたのであります。その佛陀

を中心とし、法に隨順して道を修めゆく團體が僧であります。僧には家を出て専心修行する比丘（男）の衆（あつまり）と比丘尼（女）の衆とがあり、また在家のまゝ修行するウバソク（男）の衆と、ウバイ（女）の衆とがありまして、これを四衆と申します。

法（眞理）をさとり、それを身につけた覺者（佛）となるこそ、人としての最高目標であり、佛こそ人中の最尊なるものであります。その法は「我已」を離れた永遠のまことであり、これに隨うものは榮え、これにそむくものは亡びます、佛法を中心とした僧は和合衆と譯され、和合共榮はこれによつて實現し、これによつて佛法も傳わりゆくのであります。

釋尊在世の時は佛陀は只一人でありました。然るに肉身をもつた釋尊は八十歳で入滅せられました。釋尊は、常に「法はわが師である」「我は入滅しても法身は永えに滅びない」「我のみが佛陀ではない」と教えられました。この世に出現せられた釋尊が佛教の根本でありますが、八十年の生涯の釋尊は實は久遠の如來（ほとけ）が此世にお現われになつたのであると、その説かれた自覺の内容から久遠の佛陀が明かにされることになりました。従つて佛も法も僧も十方法界（どこでも全宇宙に）常住したもうことが明らかにされたのであります。

聖德太子は勝鬘經義疏に一體の三寶ということを説かれ

ました、それは常住眞實の法身（永遠にまことなるほとけ）が佛寶で、それに歸依する中に、法も僧も含まれているとの意であります。常住眞實の法身とは即ち久遠の如來でありまして、その法身は物事の道理となつてあらわれるところが法であり、その道理と一つになつてゆくところが僧となるので、結局、常住眞實の法身に歸依することが三寶に歸依することであると示されました。常住にして眞實なるが故に、佛法僧は常住（いつでも）十方（どこでも）法界（全宇宙）に遍滿しています。

この一體三寶は哲學的分りにくいところがありましようが、これを分り易く形に示されたのが住持の三寶であります。即ち、佛像、佛畫が佛寶であり、經典は法寶であり、剃髮染衣の者が僧であります。これは一體の三寶が形にあらわれた一つのすがたであります、これによつて佛法も實際に傳持されてゆくのであります。

かように三寶に釋尊時代の原始根本の三寶あり、或は一體の三寶とか住持の三寶とかいろいろ説かれています、要するに佛も法も僧も、十方法界に常住に在す故に、一心に敬禮し奉るが佛教徒であります。敬禮することは宗教に入る門であります。敬うことによつてその尊さが分り、禮することによつてその眞實にふれるのであつて、宗教的な實感をうるのは實にこの敬禮であります。歸依という言葉も用いますが、歸依とは生きるも死するもみなそれをより

どころとし、すべてをさゝげ仕えるの意であります。歸依の感情は恭敬禮拜の實際となつて現われるのであります。

聖徳太子は十七條憲法の第一條に「和を以て貴しと爲す」と、平和國家、平和世界の實現を第一目標として示され、第二條に「篤く三寶を敬え、三寶とは佛法僧是なり」と、三寶を敬ふことによつて平和の實現をはかられたのであります。そして同じく二條の中に、この三寶は生きとし生けるものゝ最終のよりどころとなるものであり、世界萬國の究竟の宗教である、如何なる時代、如何なる人もこの法を貴ばないものがあるうか、人にして甚だ惡しきものは少いよく教うればこれに従うのである、もし三寶に依らなければ、どうしても、まがれる者を直くすることができようかと教へ示されたのであります。

覺れるもの佛陀を敬ふことによつて明るい生活となり、法に隨順することにより正しい生活となり、僧に歸依することにより和合の生活となる、明るく、正しく、和よき生活の實現こそ、三寶に歸依敬禮する佛教徒の生活でなければなりません。その明るく正しく和よき生活は、一心に、十方法界に常住したまう佛法僧を恭敬し禮拜することによつてできるのであります。

(藤井實應)

法 語

現世をすぐべきやうは、念佛を申されんかたによりて、すぐべし。念佛のさばりに、なりぬべからん事をば、いといすつべし。一所にて申されずば、修行して申すべし。修行して申されずば、一所に住して申すべし。ひじりにて申されずば、在家になりて申すべし。在家にて申されずば、通世して申すべし。ひとりこもり居て申されずば、同行と共行して申すべし。衣食かなはずして申されずば、他人にたすけられて申されずば、自力にて申すべし。妻子も從類も、自身たすけられて、念佛申さんためなり。念佛のさばりになるべくば、ゆめ／＼もつべからず、所知所領も、念佛の助業ならば大切ななり。妨げにならばもつべからず。惣じて之を言はゞ、自身安穩にして、念佛往生をとげんがためには、なに事も、みな念佛の助業なり。

奉請文

香を焚きその偈を唱へてお勤めのころがまへを調へ、
禮佛、禮法、禮僧の三寶敬禮の敬虔の作法を行いまして、
次に勤行道場へ佛様を請じ奉る文が、三奉請文又は四奉請
文と申します。

三奉請文

ぶつじようみだせそんにゆうだうちよう
奉請彌陀世尊入道場

ぶつじようしやかによらいにゆうだうちよう
奉請釋迦如來入道場

ぶつじようじつぽうによらいにゆうだうちよう
奉請十方如來入道場

この奉請文を和語としますと

請じ奉る彌陀世尊よ、道場へ入らせたまへ
請じ奉る釋迦如來よ、道場へ入らせたまへ
請じ奉る十方如來よ、道場へ入らせたまへ

この奉請文は燒香偈と共に唐の高祖善導大師の、この一條
に願う欣求淨土の熾烈な信仰體驗から集記された淨土法事
讃の中にある文であり、奉請文の通り佛方を勤行道場へお
迎へする。即ち救済主彌陀世尊、教主釋迦如來、證明者十
方如來方々を請じ奉ると申す通り、御招待申上げる譯です
から、法事讃の淨土阿彌陀佛會を慕いしての道場の莊嚴や
町重な行儀作法が定められている法式とまでゆかぬともお
招ぎの場所の形式の事柄より尊い方々が御臨席になると云
う、したすら心の勤行の場所が最上と心得へ、敬いと、つ
ゝしみとで道場へ入らせたまへと請じ奉ることがこの方の
要點であり意義があるわけですが、何故にこの世に最高の
お客をお招きするかの問題が残るわけです。

それは阿彌陀様は私達のために數々の心の悩みに對し、
片寄ることなく平等一切にお救いの悲願を成就され、釋尊
はこの救済に出合つた者を見たからこの教へを説くのだと
御教示されたのですが。如何せん私達末世の凡夫の悲みの

ために、この尊い教へに出會いながらお受けする智慧の不足から信じ難い疑いを持つ不憫者に對し十方の諸佛方は、阿彌陀經に見えますように、この事は眞實であるぞと口を揃へて誠實の證を説明されておられる通り、いま衆生の淨業に對し十方の諸佛方は誠實の證ありとお悦びになられると共に、彌陀如來の平等一子救済の悲願に叶う念佛行道者に對し、且つ釋迦如來は淨土の教へを説くべくこの世に出られたので出世説法のかいあると共ににお悦び下さることでありましょう。

こゝで淨業増進の行業ですが、兎角信行増進に對し何かと目に見へぬ數々のさまだけが日々の生活に充滿しているので、このさまたげを深く除く助縁與力の善縁を結ばなくては淨業正定は勤まらぬわけです。この強力な善縁を一家血縁眷屬且つ世の誰れとなく頂くこともさることながら、救済主の彌陀、教主の釋迦、誠實者の諸佛の尊い方々を奉請して護念を仰がため、道場へ入らせたまへとお招き申すところに奉請の理由が勤行上ある譯です。

こゝに三佛を請じ奉る三請文に併せ四奉請文のあることを次に記しますと、

奉請十方如來入道場散華樂
奉請釋迦如來入道場散華樂
奉請彌陀如來入道場散華樂
奉請觀音至勢諸大菩薩入道場散華樂

この文は宋の法照禪師の五會念佛法事讚中にある文で、佛方が私達に縁の浅い佛から深い佛へ且つ二菩薩に一奉請毎に花供養が附加されていますが、三奉請とその内容は變りなく皆彌陀如來と必ず同席の諸佛であるので順序にこだわることなく如來様をお招き申すことにより奉請の本態には變らないのです。且つ散華樂の花供養は佛への御被護の相の有様や清淨供養の莊嚴となる作事で、結構至上の作事です。ですから日常勤行中勤まるならこの上もないことゝ存じます。

三奉請文に云いならわされている以外に彌陀を世尊と、釋迦を如來とありますが、佛のミ徳の内證とミ徳の外用の顯われを十種類のミ徳として示顯されている稱號ゆえ、どの佛にも通ずる稱號です。この十種稱號の本義は自己も又他人をもさとらせるところの正覺道をきわめた佛と云うわけです。

略懺悔文

我昔所造諸惡業。
從身語意之所生。

皆由無始貪瞋癡。
一切我今皆懺悔。

我れ昔より造る所の諸の惡業は皆無始よりの貪瞋癡に由る。身語意より生ずる所一切我れ今皆懺悔す

此れは華嚴經に說かれて有る懺悔の文でありまして淨土眞宗以下の各宗は殆んど法式勤行に拜讀しております尊い文であります。

我が淨土宗では檀信徒の日常勤行は申す迄でも無く一般法要の時も略懺悔と申して必ず拜誦します。又此の他に善導大師の往生禮讚に廣懺悔と申して廣く深く微細に說かれ示されてありますが拜讀申上げますと人間の淺間しさ汚れ惡行の數々が鏡に寫し出された様で思はず稱名念佛が溢れ出ます。如何なる宗教でも特に高く立派なものであればある程懺悔を説き勧めるので有ります。基督教では悔い改め、佛教では懺悔を特に我が淨土宗では念々稱名常懺悔と御教へしております。實にや懺悔なくして宗教なしで、懺悔を教へぬ宗教は眞の宗教に非ずと言つても過言ではありませ

ん。

本文 我れは生れてより今に至るまで造つて來た諸の惡い行いや思ひは今に始まつたのではなく、此の世に生れぬ先きの先きより續いて起しつゝ有る貪欲、瞋恚、愚癡から生れて來たもので身語意から自然に生記する一切の惡業を私は今皆悉く懺悔致しますと、阿彌陀如來に申上げると共に身も心も御佛に歸依するのであります。佛教では身口意の三業と申し此の三業は善い事も爲すが大半は惡事ばかりで、此れを分けて十惡と申します。先づ此の身で殺生、偷盜、邪淫の三つ、語で妄語、兩舌、惡口、倚語の四つ、意で貪欲、瞋恚、愚癡の三つ合せて十惡になります。此れを完全に滅し清淨なるものとして十惡が十善となる様努力修行せよと佛教は教へます、此れが人間としての最大最高の道德となり佛道修行の基盤であり世界宗教道德の最高峯であります。だが私共には容易に修行や實行の出来るものでは有りません。御佛に御托せ致して念佛するより他に道も修行も無いのであります。だから「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫なり」と覺り大慈大懇の阿彌陀佛に縋りまいらせて「念々稱名常懺悔」を稱名念佛の一聲々が新しい生活へと進ませて頂く此の身此の心を喜ぶのであります。我昔所造諸惡業と素直な合掌の姿何んと氣高く上品な美しい事よ。今更の如く宗祖大師の十惡の愚癡の法然がとの御言葉に頭が下ります。

(谷部禪雄)

三尊禮について

三尊禮は六時禮讃のうち日中禮讃の一節で彌陀觀音勢至の三尊を讃歎し禮拜する行儀なのである。

この六時禮讃は千三百餘年前、支那唐代の善導大師によつて選述されたもので、願往生禮讃偈、或は勸一切衆生願生西方極樂世界阿彌陀佛國六時禮讃偈これを略して往生禮讃又は六時禮讃というのである。

先ず六時禮讃の行儀を分類し時刻を示せば

- (一) 日没にちもつ後十九拜あり無量壽經により十二光佛の名號を念誦し禮拜し後に懺悔をする(申七ツ午後四時)
- (二) 初夜しよや後二十四拜あり無量壽經の要文を禮讃し後懺悔する(戌五ツ午後八時)
- (三) 中夜ちやうや後十六拜あり龍樹の願往生偈を禮讃し後懺悔す

る(子九ツ十二時)

(四) 後夜ごや後二十拜あり天親の願往生偈を禮讃し後懺悔する(寅七ツ午前四時)

る(寅七ツ午前四時)

(五) 晨朝しんじやう後二十一拜あり彦琮の願往生偈を禮讃し後懺悔する(辰五ツ午前八時)

する(辰五ツ午前八時)

(六) 日中にちちゆう後二十拜あり善導自ら觀無量壽經十六觀により禮讃偈を撰しこれを禮讃し懺悔する(午九ツ十二時)

時)

三尊禮は善導大師の自撰による日中禮讃の中より、彌陀眞身觀、觀音觀、勢至觀により三尊の殊勝な總ての御徳を讃美し禮拜をするのである。

南無至心歸命禮

西方阿彌陀佛

彌陀身色如金山

相好光明照十方

唯有念佛蒙光攝

當知本願最爲強

六方如來舒舌證

專稱名號至西方

到彼華開聞妙法

十地願行自然彰

願共諸衆生

往生安樂國

南無至心歸命禮

西方阿彌陀佛

觀音菩薩大慈悲

已得菩提捨不證

一切五道内身中

六時觀察三輪應

應現身光紫金色

相好威儀轉無極

恒舒百億光王手

普攝有緣歸本國

願共諸衆生

往生安樂國

南無至心歸命禮

西方阿彌陀佛

勢至菩薩難思議

威光普照無邊際

有緣衆生蒙光觸

増上智慧超三界

法界傾搖如轉蓬

化佛雲集滿虛空

普勸有緣常憶念

永絕胞胎證六通

願共諸衆生

往生安樂國

音讀によりこれに節博士をつけて獨唱し唱和し禮拜をする。曲譜は極めて單調ではあるがその行儀に莊重嚴肅さが出ている。

三尊禮を訓讀にして書いてみると

南無至心に歸命して西方阿彌陀佛を禮し奉る。

彌陀の身色は金山の如し、相好光明十方を照す、唯念

佛のみあつて光攝を蒙る、當に知るべし本願最も強し

となす、六方の如來舌を舒べて證す、専ら名號を稱す

れば西方に至ると、彼に到り華開いて妙法を聞かば、

十地の願行自然にあらはる。

願くは諸の衆生と共に、安樂國に往生せん。

南無至心に歸命して、西方阿彌陀佛を禮し奉る。

觀音菩薩の大慈悲、已に菩提を得れども捨て、證せず、

一切の五道身中に内れて、六時に觀察して三輪應ず、

應元の身光紫金色、相好威儀轉た極りなし。恒に百億

光王の手を舒べて、普く有緣を攝して本國に歸る。

願くは諸の衆生と共に、安樂國に往生せん。

南無至心に歸命して、西方阿彌陀佛を禮し奉る。

勢至菩薩思議し難し、威光普く無邊際を照す。有緣の

衆生光觸を蒙る、智慧を増長して三界に超ゆ、法界傾

搖すること轉蓬の如し、化佛雲集して虛空に滿つ、普

く有緣を勸む常に憶念して、永く胞胎を絶と六通を證

せん。

願くは諸の衆生と共に、安樂國に往生せん。

以上のように訓讀にしても解釋が難しいので更に意譯し

て見た。だゝ南無至心歸命禮西方阿彌陀佛と願共諸衆生往

生安樂國とを音讀その儘とした。勿論三尊の眞意を失つた

ことと深謝している。たゞ解らせるといふに過ぎない参考

の爲に書いたのである。

南無至心歸命禮 西方阿彌陀佛

彌陀のみすがたいと清く ひかりはよもにかゞやきて
み名よぶ聲に救はれん 知るや誓いのたぐいなき

あまたほとけののべしるす ひたすら唱へみくにえと
華のうてなにおしえきき おのずとたかきさとりせん

願共諸衆生 往生安樂國

南無至心歸命禮 西方阿彌陀佛

觀音ぼさつのみめぐみは さとりの御身もうち捨て

あまねく浮世に身を下し いつも衆生をみきはめん
尊ときみひかりあらはれて みすがたきよくきはみなし

あはれみのみ手つねにのべ ほとけの國にみちびかん

願共諸衆生 往生安樂國

南無至心歸命禮 西方阿彌陀佛

勢至ぼさつの智慧高く 光りあまねくはてしなし

諸人ひかりをこうむりて 智慧はいやましたぐいなく

あらゆるくにのゆるぎては ほとけのすがた空にみつ

みなたゆみなくあこがれて まよいをたちてさとらまし

願共諸衆生 往生安樂國

和讃七五調としては漢讃の三尊禮の曲譜を當てはめて

唱へることが出来る。しかし和譯意譯でなく新に歌詞を創作し東洋的日本的明い曲をつけて發展しなければならいと思う。

三尊禮の曲節（禮讃の曲譜）は一宗協定してあるが、この形體は何時の頃であるか、曲譜も變遷はしている。千葉満定師が宗祖法然上人七百年御忌の際に出版され普及された禮讃の節博士からも一宗統一になる迄に三回程多少の變化が見られる。

勅傳三十三に建永初頃法然上人の弟子住蓮安樂のともがら、東山鹿ヶ谷にて別時念佛をはじめ、六時禮讃をつとむ定まれるふし拍子なく、をの／＼哀歎悲喜の音曲をなすさま、めづらしくとうとかりければ聴衆おゝくあつまりて發心する人あまたあるとのことであつた。その曲調も明瞭でないが聲明引聲等の影響によつて追々と完成されたものと想像する。

八百谷順應師により三尊禮曲より舞踊化して大正十一年より禮讃舞を創始され、各地に普及されていることはあまりにも有名である。

（吉水大信）

開經偈

皆さんがお寺に参詣して、讀經や説教が始まる前に、必ず耳に響く一聯の音聲、衆僧の口から出る一文の音楽的調聲が美しいメロデーで聴へて来る。この美しさ調和を持つて私達の耳に響くもの。その維那（發聲の最初の一句を謡う僧）の聲、續いて興る同音の偈文（同音で衆僧が誦する。寧ろ謡うという方が適する）が開經の偈です。それは、

無上甚深微妙法、
むじょうじんくみみうほう

百千萬劫難遭遇

我今見聞得受持、願解如來眞實義

というのである。これは私達が佛の教を頂くように成つたのは容易な因縁で出来て来たものでなく、永い／＼間の關係で、漸く佛法に遇うたのだから、只今、佛の教を聴聞するこの身は、いゝ加減に聴いて居つてなりません。私達は聞法の法悦を感じ、本當の佛教を頂いてよく味い、よく學

び、よく理解して、佛道をお互に成することに致したい。という意味なのであります。そして説くものも聞くもの一所成つて、此の再び遇い難い佛法の妙味を頂く機會を大切にし、少しでも此れを頂き、亦誤りなく傳へねばならぬと云うことであり、亦感ずること、只で鸚鵡の囀るように同和同唱した丈けではならぬのであります。

一體私共は常に佛教を馴れ過ぎて居るせいか、軽く取扱ひ過ぎて居る。抑も、私達が佛法を聞くように成つた、因縁を考へて見ると、いろいろの原因があつて、簡單なものではなく、どうして、私達は佛の教へ聞くように成つたのでしょうか、お寺へお婆さんがお詣りするとき連れて行かれたから、お寺の門前に居住して居つたから、お寺で生れたから、お坊さんにお話しを聞いたから、お母さんが信心家で、毎日お佛壇にお花やお飯を上げ、お佛壇の前で禮拜して居るのを見て居つたから、お彼岸にお寺詣りをして歸りには必ず御汁粉をお馳走に成つたから、と小兒の時の記憶は中々鮮かなものですが、此れは皆さんは氣が付かないが佛様の因縁が、皆さんに向つて居つたからであります。現在の僅かな因縁でもそれが熟する迄には、種々の經過をたどるものであります。無量壽經には『若し人、善本

なければ佛名を聞くことを得ず』と云はれて、皆さんが佛教を聞くことが出来るように成つたのは、生々世々の因縁爛熟の結果であつて、因縁がなければ、決して佛教に遇い佛教を聞くことは出来ないのである。偶然と思うても決して遇然ではないのです。私達は先づ佛縁に遇うたことを深く悦ばねばなりません。

『人身受け難し、今既に受く、佛法聴き難し今既に聞く、此の身、今生に於て度せずんば更に何れの生においてか此身を度せん。』

と云はれた通りです。宗祖法然上人は、

『受け難き人身を受け、逢がたき本願にあひて、おこれ難き道心を發して』と「小消息」の中で申されて居ります。

私達は先づどうして佛法を聞く身に成つたかと深く省察して見る必要があります。それは遇然ではなく佛様が私達を佛の教への中に導き入れて下さいました。難有き因縁が熟したのであつた。そして佛教の眞實義を知る爲めに、開經偈の美しきメロデーは、如來の呼び給う聲なのであろうか、私達は、今此の溫きお聲の中に生きて居るのであります。

(中野隆元)

さきには放逸であつたけれども、いまは放逸にふるまうことなき人、その人は、あたかも雲間をいでし月のように、この世を照すであらう。

かつておのれのおかした惡業を、いまや善をもつて覆う人は、あたかも雲間をいでし月のように、この世を照すであらう。

たとい年なお少なしといえども、佛の教えに従つて精進するものは、雲間を離れた月のように、この世を照すであらう。

むさぼりと、いかりと、おろかさに驅られて、正しき法にたがうものは、あたかも黒分の月(かけた部分)のように、おのれの兒をうしなうであらう。

むさぼりと、いかりと、おろかさを去つて、正しき法にたがうことなきものは、あたかも白分の月(輝ける部分)のように、彼のほまれは充滿するであらう。

(法句經)

歎 佛 偈

歎佛偈は阿彌陀佛の前身である法藏比丘が因位に於いて一切衆生を眞實に救はんとする無盡の大悲からその師である世自在王佛に對し、總じて四十八願別して念佛往生の本願を發される前提として何ものにも比較することの出来ない廣大無邊の佛德を讃歎して、その成就に對する強固な意志を告白し、佛の眞證を請はれた數節の頌文である。

従つて光顏巍々以下の佛德讃歎は法藏比丘の實感であり現實である。故に佛の光顏は太陽の如き存在であるに相違ないことゝ思う。たゞ異なる點は太陽の光が單なる物質の光であるに對し佛光は大智大悲であつて私達の心の闇黒を照破することが出来る。この意味に於いて日月摩尼光も聚墨の如くならざるを得ない。即ち佛光はそのまゝ正覺の大音であり現在說法であるからその響を聞く者はそれによつて佛の殊勝希有なる戒聞精進三昧智慧威德に接するのである。それは今日まで諸佛によつて究め盡されたもので、全く貪瞋痴の雲晴れた常滿月の如く世雄として神德智恵共に眞に無量無限である。かくて光明の威相は常に大千界を震動して群萌を驚かし、終に菩薩の大悲誓願を發さしむるに到つたのである。

そこで法藏比丘は愈々作佛して生死を解脫せんことを決意し、菩薩の行法中特に定慧に上達し、一切衆生の爲にその恐懼を救い大安樂を與えることを誓はれたのである。阿彌陀佛が現に諸佛に超えて光顏巍々たる所以である。「たとひ百千億萬無量の佛ありてこれら諸佛を供養せんより、道を求めて堅正にして卻かざるにしかじ」この人生に於いて念佛往生の本願が成就されることが如何に貴重であるか理解される。既にその數恒沙の如き諸佛世界があり、また不可計無數の國土があつて光明徧く照らし、諸佛の精進にして威神のはかり難いものがあつても、若しこの法藏が作佛して極妙第一の淨土を構へないならば結局一切を哀愍し度脫せしむることにはならないのである。自分は必ず他の十方世界から我が國に生るゝ者をして皆悉く清き心の悦びを得て快樂安穩ならしむるであらう。

願くは佛證明し給へ、佛の證明こそ我が本願成就への眞證である。又十方諸佛は智慧無礙であるから必ず我が心行を知り證誠護念して下さることゝ思う。要は我が本願の成就は師の證明を得ることだけである。「たとひ身を諸の苦毒の中に止むとも、我が行は精進にして忍びて終に悔いざらむ」と仰せられ、無盡の大悲を以つて一切衆生を矜哀し不退の決意を告白して、佛の眞證を得て、長戟永却苦修練行の後念佛往生の本願が成就されるに到つたのである。

法語 一枚起請文

もろこしわが朝に、もろもろの智者達の沙汰し申さるる觀念の念にもあらず。又學問をして念の心を悟りて申す念使にもあらず。ただ往生極樂のためには、南無阿彌陀佛と申して疑いなく往生するぞと思ひとりて申すほかには別の仔細候わす。ただし三心四修と申すことの候は、みな決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ううちにも候なり。このほかに奥深きことを存せば、二尊のあわれみにはずれ本願に漏れ候べし。念佛を信ぜん人は、たとい一代の法をよくよく學すとも、一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずしてただ一向に念佛すべし。

一

一枚起請文は淨土宗では三部經について大切な聖語として、朝夕のおつとめに讀誦されています。法然上人の頃から和文の法語が現れはじめて、それが難しい漢文のお經の中へ挟まれて讀まれるようになったて、法語の意味が一段と浮き出してくるようになりました。法然上人の和文の法語は數多く残っております。長いものもあり短いものもあつ

てそれぞれ特色がありますが、勤行の間に大ぜいで唱和するに適しいものは割合に少く、一枚起請文か一紙小消息か大胡消息か、というくらいのものでしよう。とりわけ一枚起請文は長さからいつても丁度いいし、深い思想からいつても、これが弟子に授けられた時の劇的な物語からいつても、まず第一に推すべきでしょう。むべなるかな、足利時代から今に至るまで、淨土門徒が集れば必ずこれを一しよに讀んで、深い教えを味い直すとともに、同じ門閥を掬む者の共同の意識を内側から固めたのであります。あたかも同じ國歌を歌えば同じ國民であることを自覺し直し、同じ校歌を合唱すれば、同じ學校の生徒であり、又は卒業生であることの意識をいよいよ深くするのと同じわけでした。

一枚起請文はその奥書にもあるように、建曆二年正月二十三日——というと、上人の亡くなられる前々日に、弟子の勢觀房源智に授けられたものです。勢觀房は常隨十八年の内弟子でした。煮炊きや洗濯の世話から、出納、應接、筆録の事に至るまで、一人で取りしきつてやつていた給仕兼秘書のような人でした。この人が、上人の御往生もいよいよ近すいたと感ぜられた二十三日に、「お形見に念佛の安心の肝要を一筆書き残して頂きたい」とお願いしたので、上人が御自筆で記して賜つたのであると古い傳記には傳えております。ですから、一枚起請文には、ただの法語というのではなく、臨終の遺訓としての一種悲壯な感懷が纏わりついているのであります。勢觀房は内氣な人でしたから、

取れるような書き方をした所もありますが、飛んでもない極樂はそんな所ではありません。きびしい實踐の國です。ほんとうに佛陀となるための修行のできる國です。第二に色界を超えているとはどういうことでしょうか。それは物質界、形質の世界を超えているということ、言い換えれば、時間や空間の制限を受けないということなのです。もし時間空間の制限を受ければ、それは「限りある」國になつてしまいます。極樂は「限りのない命と光」の國ですから、時空の制限を超えていなければなりません。しかし宗教は哲學や數學とはちがいますから、形のある表現を使つて、「西の方にある」という空間的表わし方をしたり、「未來の國」という時間的表象を用いたりして眞實の境地を表わすことはあります。

第三に、無色界を超えるとはどういうことでしょうか。

それはただ内部的な意識や空想の世界ではないということ、お經を讀むと余り、極樂の楽しさ美しさが巧みに描寫されているので、そんな國があるのだろうかといふ疑いたくなります。お經の極樂なんて、小説にすぎない、藝術家の空想にすぎない、と言う人もあります。しかし極樂は作り事や空想の世界ではないのです。眞實に在る世界を表現したのです。今までどんな美しい言葉でこれを表現しても、表現し足りなかつたのですし、これからもつと美しい言葉で表現することでしょう。結局、三界を超えるということとは、變り易い現實を超えた永遠に變らぬ眞實の世界ということ、この世界に生きることが往生極樂であります。

四

終りは、「念佛を信ぜん人は……」から「ただ一向に念佛すべし」まで。

この一段は、淨土の信仰に入ろうとする者は、人間的な知性に頼ろうとする心持を捨てて、全くの愚鈍の身に還つて、ひたすらに念佛を申せ、という教えです。

人間の働きのうちで知性という働きは最も大切です。人間には他の生物にない知性という優れた働きがあつたからこそ、他の生物に優越して現在の地位を占めているのです。知性はどこまで進んで科學を發達させ文化を創り出していくか、その前途は想像もできないほどです。しかしその知性にも限界があります。人間の力に頼りすぎて何事でも知性で割り切ろうとするのですが、知性は至るところで限界にぶつかります。この限界を見極めて、知性を超えなければなりません。勿論、超えられるべき知性は人間的知性です。人間的立場を超えたときに、信仰の世界は初めて開けてくるのです。「智恵第一」の法然房は、ついに自分の知性の限界を見極めて、「愚痴の法然房」に還つたのであります。

すでに紙數がなくなつたので、この話題は他の場所で再三述べたことがありますから、今は省略しましょう。

語義(文中で解説しなかつたもの)

(佐藤賢順)

三心、心の持ち方、至誠心・深心、回向發願心。

四修、念佛の稱え方、恭敬修・長時修・無余修・無間修。

二尊、釋尊と阿彌陀佛。

本願、如來のみ名を呼んで救いを求める者を必ず救済するということ、如來の約束。

尼入道、髪を剃つた在家の老婆、何事も知らずただ念佛を申す人。

念佛と回向

讀誦禮讚等の正行も念佛信仰を培い念佛信仰を増進するためのもの、淨土門ではすべてが念佛の一行に結歸される勤行式の次第としてお經文の讀誦・三尊禮讚に次いで、一枚起請文・小消息などの御法語を拜讀し、それから念佛一會を修することになつてゐるのは、よく其の意を明かにするものである。或いは誦經に次ぎ直ちに攝益文を唱えて念佛一會とする場合もあり、また同様の意をあらわすのである。攝益文とは

光明遍照 十方世界 念佛衆生 攝取不捨

と云う聖句で觀無量壽經に出る文である。此經には阿彌陀

さまの御身に八萬四千の勝れた相好を具え、一々の相好から亦八萬四千の光明を放ち給うことが説かれ、今の文は光明の妙用を擧げたのである。佛身の光明は常恒にして又はてはなく、淨土も穢土も十方世界普く照さざるところはない。しかしながら世界のすべての人々が等しくその光を感じ受じてゐるのではない。光は隅なく照し人々の感能はもとより具つてゐるとしても、たゞ大悲攝護の心光を正しく受け得るものはお念佛の行者に限られる。如來は大悲の本願に念佛往生を誓われて淨土への直路を開かれたのであるから、攝取護念の心光を添えて念佛する者をこそ片時も捨てず徹照し給うことわりである。それはそうなければならぬ超世の本願の利益である。法然上人はこの攝益文のころを

月かげのいたらぬさとはなけれども

ながむる人のころにぞすむ

とお詠みになつてゐる。月の光は皎々として野にも山にもいたらぬ處もなく照しかゞやいてゐるけれど、人々は多く目前の利益に心奪われてそれに眼を向けようとせず、ぼん

のうの闇に自らを閉ぢこめてゐる。たゞかの明月を仰ぎ見て光りの中にある自分に氣づくものの心にのみ、さやかに月影は澄むのである。見ると見ざるとは月のとがではなく、人の至らぬためである。佛の大悲にふれて信する心は生ずるが、信受の一念の起つた時大悲がそこに徹到するのである。光明に氣づくことは同時に黒闇そのものゝ、自覺ともなるのであろうが、經には「斯の光に遇えば三垢消滅す」と説かれる。佛を念すればわれらの愚痴は智慧光に照され腹だつ心は歡喜光に除かれ、貪濁の心は清淨光に淨められるのである。

このように攝取不捨の心光ひとり念佛者にのみ蒙るのはお念佛の一行が佛によつて選ばれ佛の強大なる願力がこゝに專注されているからであり、善導大師は更にその理由を三縁の義を以てお示しになつてゐる。即ち一に親縁と云い佛と行者と親密にして相離れぬ人格關係をもつからである。衆生口に常に佛のみ名稱えれば佛これを見給う。身常に佛を禮拜恭敬すれば佛これを見給う。また心常に佛を念すれば佛これを知り給う。佛と衆生と三業相應じ密接するを示されたのである。二に近縁と云い念佛する者の心に應じて佛がその眼前に立ち給うことである。三に増上縁と

云い、總じて念佛者の上に加わる佛の強大な御力である。念佛すれば罪業滅し、佛に護念せられ、臨終には來迎を得るなど現當に種々なる利益を蒙るを云う。まことに念佛者にとつては、佛は不斷に眼前にはたらく生ける救済力なのである。大師は親證三昧の大徳と仰がれた方で、かような三縁の説も自らの體驗上のお示しとしてまことに尊く拜される。

さて佛の攝取護念を心に念じ、或いはありありと佛の光明に攝護されている思いで攝益文を唱え次に

念佛一會

に入るのである。日常勤行は心行策勵のためで善導大師の「念時日を隔てず」のお言葉からすれば日別に勤めてお念佛申さぬ日はないようにする。常念相續のためであるから數遍を多くつとめたいものであるが、お念佛の多少は勤行の場合により五百遍一千遍など隨宜とされる。本願の念佛は心念ではなくて口に佛のみ名を稱えることで、特に法然上人は「南無阿彌陀佛」となえむ聲につきて決定往生の思をなすべし」とお導きになつて居られる。まことに簡易にして廣大な教えである。人々の性向は様々であつておおら

かに念佛申すを第一とも教えられるが、別時のつとめとしては精進に求め勵むのでなければならぬ。「一念十念むなしからずと信じて無間に修すべし」、「信をば一念にむまると信じて行をば一形にはげむべし」。一形とは生涯を貫いてはげむことで、決定の信があればこそ自づと欣求され相續されるのである。宗祖の門弟で日々八萬四千遍の念佛を怠らず申したと云う隆寛律師は「一念の御法にあかぬ嬉しさに數遍を重ねる」と語つて居られる。先徳の念佛精進がたゞ尊く仰がれる。入信の初後、信の淺深もあつて念佛する心持は時に相違もあろうが、ともかく私達にとつては一日の中稱名の相續される時のみ、心澄淨なるを得、一聲一聲に佛の攝護をいたゞく悦びを味うことが出来る。

願以此功德 平等施一切 同發菩提心 往生安樂國

これは總廻向と云われ、觀經疏玄義分に出る文である。以上に修した誦經・禮讚・念佛の善根功德を、たゞ自分ひとりのためにするのではなく増廣して平等に一切衆生に廻施し更に自他同じく菩提の心を發しともぐに淨土に往生せんと願うのである。これが大乘の利他精神である。たとい一粒のさゝやかな善根でも一切衆生の心田に蒔けば、それは増廣して曇り知れぬ徳として實現するにちがいない。すべ

ての衆生は互いに因縁の關係を離れない。亡き人のためにも善根をねんごろに廻向すれば、必ず薰發の縁となつてその人の菩提に資せられる。こゝに云う菩提心は多くの衆生と共に淨土に往生せんと願うことであり、禮讚に一々願じて「願くは諸の衆生と共に安樂國に往生せん」とあるのはその意である。平等に一切を救済せんとの本願であれば、願往生の道は亦かくなければならない。人間の心狭く自己の安樂のために、淨土を求むる者もなしとしないであろうが、すべてを包擁して皆眞實の願生道に向わしめるものである。

(筆者は大正大學淨土學副主任 小澤勇貴)

御歌

露の身はこゝかしこにて消えぬとも

心は同じ花のうてなぞ

むまれてはまづ思ひいでん古里に

契りし友のふかきまことを

四弘誓願

衆生無邊誓願度

煩惱無邊誓願斷

法門無盡誓願知

無上菩提誓願證

自他法界同利益

共生極樂成佛道

佛道とは願いを成しとげようとする努力の道であります。勿論、その願いは自分の利益の爲めではありません。自分と俱に社會を作つて居る人々が眞實に生きるように、社會をして眞實を受け樂しむ淨土にしたいと言う願いで、此を菩提心（ぼだいしん）と言います。

凡そ佛教徒たるものは先づ菩提心を發しなくてはなりません。此の菩提心を發する文句が今の四弘誓願（しぐぜいがん）です。平易に言いますと、自分のことを考へず他人

につくしたい、佛の様に眞理を得た知能で他人を救いたいと言う願いです。阿彌陀佛も、前身が國王であられたが、菩提心を發して世自在王佛の指導に依つて、眞實に生きることを望む人々の爲めに、永い努力を経て、すべての人が眞理を實現するに自由自在な淨土の建設をなされたのです。だから阿彌陀佛の淨土も亦、菩提心の結果できたものです。

「社會を淨化しよう」、「人々をして眞實に生きるよう」と言うのが佛教者の出發點をなすのであつて、此を淨佛國土（じようぶつこくど）成就衆生（じようじゆしゆじよう）の願いとも言います。すべての人々を眞實に生（な）そう（成就衆生）と言うのです。此が佛教の第一歩ですので私も經を讀む時に此の意味の四弘誓願（しぐぜいがん）を唱えます。

衆生無邊誓願度（しゆじようむへんせいがんど）

此が第一句ですが、此意味は、自分と俱に社會を作つて居る人々（衆生）は限りなく數多いが（無邊）、自分はどうかして此の人々を眞實の彼岸に渡したい（誓願度）と言うことです。眞實の彼岸へ渡したいと言うことは、眞實を得せしめたいと言うことですが、私共淨土教徒としては、す

べてのものが阿彌陀佛を信じて、そのことに依つて、あの淨土に到ることに依て、あの淨土を現實社會に實現したいと言う願ひとなるのです。

煩惱無邊誓願斷（ぼんのうむへんせいがんだん）此の第二句は、自身はもとよりのこと他の人々のまよい（煩惱）をすべてなくしたい（誓願斷）と言う願ひである。まよいを佛教では煩惱（ぼんのう）と言いますが、此は私共の正しいところを「なやまし苦しめるもの」と言う意味です。

私共の感情は清らかではありません。目に見るもの口に味うものや、此の身の五官にふれるものについて、たゞ感ずるまゝに利己的に貪つたり憎んだりします。又この感情がつみ重なつて悪事をくはだて又は執着します。然し良心のさゝやきがないわけではありませんが、此の良心がおしつぶされて、冷靜に理性を取戻さんとしても出来ません、感情ははげしくして正當に理解することを妨げます。此のように、良心や理性を抑へ妨害するものを煩惱と言うのです。又、佛教の苦とはこのような苦を言うのです。手足のきずのいたみ等ではありません。眞實を通せないことを眞の苦と見て、此を取除きたいと願うのです。

煩惱の根は自我です。例へば、他人の税金は當然のよう

に見えるのに、自分にかゝつた税金は過重に思はれ憤まします。ゆつくり調べて見て、止む得ずと見ると欣然とせずふんまんしながら我慢しようとしします。この憤然として「我慢」する「我」が自我です。すらすらと正確さを見極めて、さらりと納税させないのが「我」です。「我慢」とはいやいやながら服すること、自我を克伏して困難をたへることと雲泥の相異です。此の様な我に妨害されることなく當然を當然としてすらすら行くようにするのが煩惱の斷です。

法門無盡誓願知（ほうもんむじんせいがんち）

此の第三句は、眞理（法門）は仲々知りつくすことは出来ないが（無盡）、然し乍ら一大努力をして、佛の様にすべての眞理を知ろう（誓願知）と言う意味です。第二句に述べた無盡の煩惱を斷するものは眞理の知です。煩惱の根は「我」でありますが、我と言うようなものを精神の中に育て上げるものは無明であるとされます。無明とは眞理に無知であることです。道理を見ないから、自分の感情を正しとし、その感情の主人としての自我を育て上げることにもなります。だから、上の句の煩惱を「斷つ」と言うことと此の句の意味して居る道理を知ると言うこととは同一の

ことの表と裏とになるわけです。

無上菩提誓願證（むじようぼだいせいがんしよう）

此の第四句は、文字通りには佛のさと（無上菩提）を得て佛となろうと言うことですが、その目的は佛の能力を得たいと言うことです。佛の能力とは、眞理を知ることにより依つて得られる、人を導き救う能力です。私共は阿彌陀佛を信じ、淨土を願うのは、第一句の、社會淨化の目的にあります。その淨化のためには十方世界の人々を教へ導く佛の能力を得ねばなりません。

淨土は佛となる道場です。佛とは萬物をば夫々に生かす道理に達した方であつて、従つて亦たすべての人に夫々の正しき生き方をなさしめ得る能力を得た方です。私共は淨土に生ずることに依つて此の能力を得るのです。

善導大師の、作られたもので、私共が淨土を願うために唱えるのが發願文ですが此の發願文には、「阿彌陀佛の國に往生せしめたまへ、彼の國に到りをはつて、六神通（救さい能力）を得て十方界（現世）にかへつて苦の衆生を救攝（救さい）せん……至心に阿彌陀佛に歸命したてまつる」とあります。極樂へ樂隱居に行きたいと願うのではありません。

此の様な能力のある無上のさと（阿彌陀佛に歸命す

ることでもつて得たいと言うのが此第四句の意味です。

自他法界同利益（じたほうかいどうりやく）

共生極樂成佛道（ぐしようごくらくじようぶつどう）

此の二句は合せて結句であります。四弘誓願は元來四つの佛教徒の願いと言はれるもので、總願とも言はれて佛教に入るものの基本的な願いです。淨土を信じようと信じまいと佛教である限りは此の四句にある願いを起すのです。そして四つの願いは上の四句で終つたのですが、私共淨土教徒は、此四つの願いを、阿彌陀佛の淨土に生ずることを通じて完成すると誓うのがこの結句です。

此の二句の意味は、自分も他人も（自他）、全世界のものが平同に佛の利益に預るように（同利益）と言う此の願を満足するために、私もあなたも、いやすべての方々と共に淨土に到つて（共生極樂）、佛の能力を得て社會淨化をしよう（成佛道）と言うのです。

淨土に往生を願うは、現世に淨土を築くためである。此のことは、現世にあるもの、淨土を願うものは、今此の時から、阿彌陀佛の働きに参加するものである。法然上人は「得たる心持して念佛せよ」と仰られました。社會淨化は死後の問題でなく今直ちに、佛の力を受けた心持して勉めねばならない。信心の要諦は、佛道を求めつゝ求める佛道を現實化しようとすることにあります。

（筆者は大正大學教授 佐藤密雄）

三身禮

南無西方極樂世界

本願成就身阿彌陀佛

南無西方極樂世界

光明攝取身阿彌陀佛

南無西方極樂世界

來迎引接身阿彌陀佛

三身禮は阿彌陀佛の本願成就、光明攝取、來迎引接の三身を禮拜することである。それは極樂世界に生ぜんがための意である。衆生のために大慈悲心を起して誓つて救わなければやまない法藏比丘の誓願——それがはるかな遠い昔に成就されて、今現に極樂世界に阿彌陀佛としてましますのである。本願成就の阿彌陀佛こそ、疑いなく迷えるわれらをその本願力によつて救つて下さるのであらう。人の世はまことにはかない。はかないからといつて悲しんでばかりはいられぬ。人は力の限りをつくして、現實世界に生きて行かなければならない。けれども、やはりこの世は苦しくはかない。このような世の人のために佛は四十八の願を成就されて、われらに慈悲の手をさしのべて下さるのである。

觀經に、佛心とは大慈悲是なり、無縁の慈を以て諸の衆生を攝し給うとある如く、佛の慈悲はまことに誰彼の區別なく、濫かく念佛の衆生をつつんで下さるのである。阿彌陀佛の四十八願の中に光明無量の願（第十二願）がある如く、限りなき彌陀の光が、われらを照して下さるのである。それはいついかなる處でも、念佛を唱える者を攝取護念し給う故に、光明攝取というのである。彌陀の光はわれらを守り、人生行路の燈臺となるであらう。

人生は劇の如しとも、人生は旅の如しとも言われる。劇にはさまざまな出來事が起り、旅には起伏ある山野を通るのであらう。そして間違ひなく劇は幕が下り、旅は終るのである。それがこの世のさだめである。しかし最後臨終の夕に、阿彌陀は慈悲佛をもつて來迎し、諸の功德を修したものの、例えば稱名念佛、布施、持戒、禪定等——特に念佛の衆生を間違ひなく引接して下さるのである。（第十九願）人生の安心は、ここに定るであらう。法然上人は、この間のことを次のように申された。

「阿彌陀佛の本願は、名號を以て、罪惡の衆生を導かんと誓ひ玉ひたれば、只念佛だに申せば、佛の來迎は、法爾の道理にて、備はるべき也。」

三身禮は、このような救いの力を持たれた阿彌陀佛に心から歸命し禮拜するのである。しかも五體投地の最高の禮をもつて。

送佛偈

諸佛隨緣還本國 普散香華心送佛
願佛慈心遙護念 同生相勸盡須來

「諸佛、緣に隨つて本國に還る。普く香華を散じて心に佛を送る。願くは佛の慈心、遙かに護念したまえ。同生相勸む、盡く須く來るべし」

此は香偈と同じく善導大師の「法事讚」（淨土宗全書、四、三〇頁下）から出ております。

さて、一句一句、一打一打に誠を盡して修し來つた勤行は終らんとしている。涌然たる法悦の高まりのまま、最後の此一偈をゆつくりと味わいながら諷する氣持は眞に清々しい。譯しますと――

阿彌陀佛十方諸佛は今やそれぞれの有縁の國にお還りになる。香を薫じ華を散じて、心をこめてお送り致します。

しかしお送りするとはいうものの、西方淨土なるみ佛の慈光は、いつ、どこでも、光被限りなく、念佛の聲する所なにとぞ常に我等をお護り下さいますように。今この誦經の一時によつて一入それを身體にひしひしと感じます。

それはみ佛の力でありながら、又、私の血となり心とな

つて、私に強い悦びと生きがいを感じます。この悦びは、とても私一人だけに止めておくわけにまいりません。此世に生を同じくするものに互に勸め合つていきます。だれもかれも、この淨土の行に参加しようではありませんか。送佛偈というものの、送佛の外に、勤行を終つて佛に生きる者の喜びを端的に示している。

尚、讀方について、第一句の「諸佛」は、請佛になつてゐる本が多いが、本來正しくは諸佛です。其他、嚴密に考えるといろいろにとれる點があるが、後代の註釋によらず、大師自身の書き表はし方を基本として考えていくべきある。「心」は、心に於てというのではなく、法事讚によく使われる一心にとか、心をひきしめてというふうに解するのがよい。「勸」はツトムとも讀める字であるが、他の大師の著書に於ける使方（般舟讚、淨、四、五四六、上・同五四七、上・同五三四、下・往生禮讚の後夜及日中偈・同三六〇、下）を考えると「すすむ」がよいと思われる。「來」も、終了した法會に來るのはおかしいし、淨土に「往」くのではないから、少くも淨土の勤行を修している者の側に來る事である。其は大師の「般舟讚」「普勸十方生死界 同心斷惡盡須來 一入涅槃常住國」徹三窮後際「更何憂」（前掲、五四六、上）に同じように使われた同じ句があるが、之も、往くのでなく、同じ淨土の行への参加と解するのが筋が通るのと同様である。従つて私記（同、九一、上）の説明もあるが妥當ではない。

（眞野龍海）

後記

○太陽の季節も過ぎてそよる秋風が立ちこめる頃となつた。實の秋に八月下旬の陽氣では些か懸念されたが殊のほか残暑が鋭しいのでこの分だと今年も豊かな實の秋を迎えられよう。まことに喜ばしいことである。

○太陽の季節と云えば、今世間ではせつかくのこの美しい言葉もユガめられてまともに通じない。太古より今日まで人類をはぐくみ育てゝきた美しい天體の一つ、それをまじりけなしの純粹な響きのまゝで太陽と呼ぶことは少くとも當分の間は望めない。たつた一つしかない太陽を何故もつと大切にしてくれないのかと思わずグチもこぼしてみたい。

○もつと言葉を大事にしよう。思えば佛教のことばも世間で用いられる場合、その本質的意義が失われ全く逆の意味に解され死語となつてゐるものが数多い。たとえば往生なる語もその例であらう。○けわしい社會により力強く、眞實なる生の奮みをすゝめんがため

にみのりを説く佛教が、かくあることはいさゝか寂寥の感が深い。○しかし、それ故にこそ吾々の法然上人讃仰運動の眞使命がありより力づよき歩みが切望されるのである。

會員皆様の一層の御助成あらんことを祈るや切なるものがある。

○去る八月廿二日、秋雨に煙る信濃路を、浄土の先生方―佐藤密雄良智、竹中の各先生―の御出講をいたゞいて盛大に浄土の集いを催した。会場は佛都長野の善光寺。

○特に密雄先生の「現代と浄土」なる講演は聴衆に多大の感動を與え反響を呼んだ。質疑も盛んであつたとを斷つこと知らず閉會後も續行された程である。

○浄土教が現代の思想と新しき對決をいとなむ糸口はこんな場から生まれるのかも知れない。

○今度、竹中先生が新心理學講座（五卷河出書房）の中、宗教と信仰の心理學の部門を擔當し御執筆された。仲々好評、是非御一讀あらんことを。

○そういえば、密雄先生は現代佛教聖典講座の中、無量壽經を御執筆中。浄土の先生方の原稿ノイロ

―ぜも最高潮の感。（宮林）

○十九日は中秋の名月――本誌が皆様の御手許にとどく頃――秋はしづかに心にしみとおつて来る。騒音の森の中、ビルとビルとの間にも、山なみはるかに、重くたれ下つた稻穂をも照す、豊年を祈るかのやうに、

○本誌特集號と併行して、宗務所教學部より、宗祖七百五十年御忌記念出版の一つとして、「日常勤行式」が刊行された。（定價一部三十五圓、送料實費）香澤梵淨氏の名筆に加へて美麗なオフセット印刷、定價に比して上々の出来。

○肝臓炎で慶應病院に入院されていた戸松學瑛師、結果良好にて、過日退院された。一日、本誌編輯部からも御見舞に參上した。百日の闘痛であつたとの事。

○次號には、大野法道先生に「お十夜の意義」について御執筆いただく他、本宗社會事業の特集を豫定しております。

○この日常勤行式特集號はトラクト形式に致しまして別に刊行しております。御施本用に御利用下さい。（定價一部三十圓、送料實費）

○本誌、諸先生方の御寄稿により漸く編輯を終へた。御禮を申し上げます。（水谷）

會費（誌代）

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手數料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「浄土」 九月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十一年八月廿五日印刷
昭和三十一年九月一日發行

（定價三十圓）

編輯人 竹中 信常

發行人 佐藤 密雄

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都品川區上大崎一ノ七八三

發行所 法然上人讃仰會

電話 東京八二一八七番

特價奉仕

- 一、寺院用佛具類一式
- 一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

御袈裟法衣御調進

- 錦金欄
- 御水引
- 御幡
- 特種織物
- 御打敷
- 稚兒衣裳

御法要に梵鐘供養に新装の稚兒貸衣裳を精々御下命の程を

増上寺
宗務所
大正大學
芝中高校
淑徳學園
御用達

東京都港區西久保巴町一〇六

野村法衣店

電話芝(43)〇四二八番
振替東京七八九四五番

幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にの
ットで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
答・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

鎖ブランコ2人乗	¥ 13,000
鎖ブランコ3人乗	¥ 15,000
鎖ブランコ4人乗	¥ 22,000
鎖ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)
組立説明書送付